

『歴代宝案』 訳注本第八冊の刊行に際して

沖縄県教育委員会

教育長 金城 弘昌

沖縄県は、かつて琉球王国として、中国（明・清）との冊封・朝貢体制を軸に、その地理的優位性を發揮して、アジア諸国と交易し、大きな影響を受けつつも、個性豊かな文化を育んできました。十四世紀からおよそ二百年にわたり、琉球は、日本、朝鮮国、シャム・パタニ（現在のタイ）、マラッカ（現在のマレーシア）、スマトラ・パレンバン・スンダ・ジャワ（以上現在のインドネシア）、安南（現在のベトナム）等の国々と交易を重ね、東アジアの一大貿易拠点として発展してきました。これら諸外国との交易関係を支えたのが、琉球と中国との冊封・朝貢体制だといえます。

『歴代宝案』は、琉球王国とこれらアジア諸外国とのおよそ五百年にわたる外交関係文書を集成したものです。王府は、長く天妃宮に保管されてきた外交文書の破損・散逸を恐れ、外交を専任する久米村の人々にその編集を命じました。こうして一六九七年に『歴代宝案』第一集四十九卷（一四二四年～一六九七年までの外交文書を収録）が二部作成され、王府と久米村にそれぞれ保管されることとなったのです。その後、第二集二〇〇卷・第三集十三卷（一六九七年～一八六七年）が編集され、ほかに別巻八冊（うち、第二集目録四冊）が現存しています。王府に保管された『歴代宝案』は、廃藩置県の際に明治政府に引き継がれたとされますが、いまだにその所在は不明です。一方、久米村に保管されたものは、一九三三年に旧沖縄県立図書館に移管されましたが、去る沖縄戦で散逸し、影印本や写本が数種残されただけです。

『歴代宝案』は、沖縄の外交史料であるばかりでなく、東アジア史研究にとつても第一級の史料として、沖縄が世界に誇る文化遺産です。しかしながら、膨大かつ難解な史料であるために、長い間、ごく限られた研究者の間でその存在が知られるのみでした。沖縄県は、平成元年度（一九八九年）から、現存する各種の影印本や写本をもとに『歴代宝案』校訂本・訳注本の編集事業に着手し、平成三年度（一九九一年）から刊行を開始しました。この編集事業の目的は、『歴代宝案』を一般の読者向けに広く普及をはかることで、琉球王国交流史研究の

進展に役立て、あわせて県民のみなさまが郷土の歴史を再認識し、さらには国際社会に対する沖縄文化発信の基礎資料として活用することにあります。

本年度は訳注本第八冊を刊行いたします。訳注本は、『歴代宝案』の内容をより分かり易くするため、校訂本の漢文を全文読み下し、必要に応じて語注やルビを付したものです。本書には、清嘉慶四年～嘉慶十三年（一七九九～一八〇八）の間の進貢、接貢、謝恩、慶賀、琉球船や中国船等の漂流、漂着民を相互に送還する際に交わした文書等が収録されています。本書収録の時代は、嘉慶帝の前半期、すなわち乾隆帝（太上皇帝）が崩御し、それを継いだ嘉慶帝が実質的に統治を開始していく時期にあたります。乾隆後半期からの内政の綱紀弛緩、海上における海賊活動の活発化などにより清朝の支配秩序が不安定になりつつも、琉球・中国間の往来は安定的に実施されています。本冊では前冊から引き続き、北京へと赴いた琉球使節の詳細な紀行が記されるなど、活発な琉中交流の様子が窺われます。また、琉球国王は本書において尚温・尚成・尚灝と目まぐるしく代わり、新国王即位に伴う冊封使の来琉及びその後の官生の国子監入学についてのやりとりが収録されています。特に官生については、従来の四名からいわゆる副官生を含めた八名の入学を願った経緯が詳細に記されています。このほかに、毎年のように起こる民間船の漂流や漂着への対応、進貢船の遭難に対する海上搜索など、両国が危険な海上交通を担った人々を、協力して救助・送還しようとするやりとりを見ることができます。さまざまな内容を含んだ本書が、琉中関係史ならびに東アジア史研究のさらなる発展に寄与することを願っております。

最後に、本書の刊行につきましては、沖縄県歴代宝案編集委員会および同作業部会の御協力を得ました。また訳注にあたっては、担当された濱下武志先生をはじめ、参考史料を所蔵する国内外の各研究機関および多くの皆様に御尽力・御協力をいただきました。深く感謝するとともに、今後とも、歴代宝案編集事業に、なお一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。刊行のことばといたします。